

# 「これからも生き延びる私達」

## —京都町家再生研究活動における考察—

### (都市自然&コミュニティ)

タウンデザイン建築計画研究所  
冷水 隆治

#### 1. はじめに

今回の論文は京都町家<sup>1)</sup>の再生方法を研究活動する中で、永年都市で住まい続けた京都町家群の中には、日本の都市での集合住宅として住まい続けるための必要な要素(エッセンス)が含まれているのではないかと研究を重ねております。京都市で「京都市伝統的な木造建築物の保存及び活用に関する条例」が適応されたが、中心部で木造町家が無条件に残され又、新築される環境ではなくなってきている。今回の論文は、都市に住まうためのスタイル・方法を見つけ出すための、今後の詳細な研究活動の指標とするものであります。

#### 2. 私達の生まれ育った時

##### (戦後の60年)

第二次世界大戦で私達日本は欧米の合理的科学の力で圧倒され、叩きのめされた。1945年以来、欧米の合理性を克服するため、今までの日本人の生活スタイルを完全に否定し西欧科学、文化を咀嚼する事に集中していった。

この半世紀の間に欧米の科学技術を身につける事ができたが、西欧個人主義は完全に身につける事が出来ないで今日に至っている。2)

生物界の進化は気の遠くなるような年月をかけて適応していくのだが、私達人間は住生活環境の変化にどのように適応していくのだろうか。

私達、戦後すぐに生まれ育った時からの半世紀余りはあまりにも変化の激しい年月であった。高度成長期と共に都市周辺のスプロール現象とニュータウンの開発とが入り交じり都市の人口爆発に対応してきた。この半世紀に西欧合理的科学を受け入れ、技術的には解決しながら乗り切ったのである。そこには西欧合理的科学の力、考え方を鵜呑みにしなければならぬ程のスピードが要求された。その様な社会の中で、私達は新しい生活環境に順応していたのだろうか。日本人の体質に合った生活形態を研究する余裕がなかったのかもしれない。又、日本文化を引き継ぐシステムを創る事の必要性に気がつかなかったのかもしれない。

この変化の激しい時に、私達日本人に即した生活形態・システムの基礎研究が必要だったのではないだろうか。

#### 3. コミュニティを引き継いで

##### (都市生活に必要な要素-1)

日本全国、古くからのコミュニティは引き継がれている。地縁社会ではなく、長い年月をかけて信頼しあう関係を築いてきた京都市内の町家のコミュニティは現在も持続している。

今、その京都で大変化が起こっている。木造住宅から不燃積層共同住宅(マンション)へと建て替えられている。町家が長い年月をかけて蓄積した都市生活、住まい方が受け継がれてきたにもかかわらず、新しく造る不燃積層住宅に引継ぎが出来ない状態で町内会のコミュニティの崩壊が起こっている。

長年引き継いできた町家はコインパーキングになり、独居老人がひそかに住まい続けている。新たに創られる住居群は経済的な側面を優先するあまり、古いコミュニティと新しいコミュニティとの融和に多くの努力をかけなければならない状態にある。

言い換えれば、私達都市計画家・建築家が問題意識を共有し、提案をしていれば住まい方の指標の参考になっていたかもしれない。現代日本の街中で住まい方の指標がないままに只、経済的側面を中心に展開し、創り続けることをしているのである。

新しく開発されたニュータウン居住の人々は自治会を組み、自らの安全と快適な生活を守ろうとしている。20年、30年、50年と年月をかけて人々は信頼関係を築きあげようとしている。

私達都市計画家、建築家は町の自治活動を手助け出来る職能の一つである。只、気をつけなければならない事に、専門的能力を権力者が利用する事があったのを認識しておかなければならない。

第二次世界大戦のポーランド・クラクフのアウシュビッツ強制収容所で人間の集団生活をコントロールして多くの人々が犠牲になった事を忘れてはいけない。

又、日本の第二次世界大戦で苦い出来事があった。

町内会、隣組を通じて国民は思想統制と戦争協力を強いられた。

1956年に自治会の調査が行われている。3)

今、日本の各地で行われている専門家によるコミュニティ活動は何をしようとするかを熟考しておかぬければならない。即物的なイベントも必要であるが、長い年月をかけて形成していくプロセスも必要である事を、、、、。京町家のコミュニティ形成の仕方は、不燃積層住宅が林立する中で都市生活をする私達にとってコミュニティ形成プロセスの参考になる要素が多々に内在しています。それは日々、うまく住まう知恵の積み重ねなのです。

#### 4. 都市自然と共に暮す

##### (都市生活に必要な要素-2)

街が一千年以上生き続けるにはどのような環境・設えが必要なのであろうか。

アフリカ大陸のモロッコ・フェズ旧市街地は、約一千二百年生き続けている。砂漠の中に潜り込むように土で固めた家屋の隙間からはモスクが見え隠れし、人々に安心と連帯感を与えている。砂漠の自然と安心感と同居したコミュニティは人間が住まうための動物としての本能を覚える。

日本の京都もほぼ同じ千二百年の歴史をもつ。脈々と歴史が続いている。その京都でどうして長い間人々は住まい続けられたのだろうか。その答えの一つに四季折々の自然との向き合いがあげられる。

日々の生活から季節の節目に自然との向き合いが豊かな感性を育てている。緑のヒエラルキーで生活を豊かにしている。座敷・中庭・裏庭・家の前の鉢植え・寺・神社の木々・加茂川の木や水・東山・北山の緑。極東の日本で、温暖豊かな盆地には豊かな自然と共に生活する習慣が備わっている。京都市内には人々が密集して住む町家は自然とのふれあいの知恵がぎっしりと詰まっている。又、都市共有空間としての鴨川やお寺の木々が人間の感性をはぐくみ、生命体としての人間の本能を殺がずに暮らすことをさせたのだろう。

丁度、ニューヨークマンハッタン島のセントラルパークがニューヨーカーにはなくてはならない存在であるように。

現代の都市づくりにはかつて無い実験がされているようである。短期間の経済コストの収支が求められている。人間の本能や生態がどこまでも追従する事的前提下で科学技術優先の都市づくりがされている。都市づくりが短期間の収支であるため存続するのも短期間でしかないのであろう。その中で少なくとも都市自然は豊富に創る事を望む。身近な自然は日々の生活に潤いを与え、我々が生き延びる要素になり

ます。次の世代に引き継げる都市自然は人間が生物として生き延びるための必要条件でありあります。

#### 5. 持続するまち

##### (都市生活)

現在の日本で全国的に高齢化が進んでいる。既成市街地、ニュータウン、古都京都においても高齢化による空町家が増えている。町家が壊され駐車場になったり、不燃積層共同住宅が経済性を追求して林立している。現在の京都中心部は古い町家が序々に消滅して、駐車場に替わり、住まいであった町家が飲食店、物販店に替わり、不燃積層住宅が林立し町家と混在するようになった。4)

多彩な人々で構成される街の生活は常に混乱と破壊と再生を繰り返します。人々が間違った方向や目標を見失った時に私達都市計画家は方向付けの手助けをしなければならない職能であります。

私達都市計画家が忘れてはいけない事の認識として、その街の持っている本質を持続させることをしなければなりません。京都町家郡の中には永年培われてきた合理性の積み重ねが生きていている。その合理性を一層磨き続ける事の必要性を認識しなければならない。私達が引き継がなければならないのは「合理性の精神構造であり、知恵を出し続ける事」です。

経済優先の社会において「持続するまち」はどのようなしくみがいいのかを今、私達は問われているのではないのでしょうか。

現代の街づくりは経済性とどのように向き合うのでしょうか。市民性の平等と連帯が維持・持続できるようなしくみをつくる事はどのような事なのでしょうか。いずれにせよ、将来の子供達に引き継ぐものができるような答えが今求められているのではないのでしょうか。

#### 6. これからも生き延びる私達

日本の2000年の歴史において多くの困難が連続してきました。人間同士の闘い、自然との闘いの繰り返しでした。その中で多くの文化が生まれ育ち私達日本人を賢くしました。生き延びる知恵をつけてきたのです。

明治時代以降、私達は近代という文明社会に突入しました。日本人の意志とは関係なく西欧の植民地化に抵抗しようとするのが如く、必死で近代技術を取り入れていったのです。その最終章でニュータウンの建設、都市の近代化・高層化がこの日本で邁進されてきました。

少子高齢化の社会に突入した現在、私達は新たな認識をする時期にきたのではないのでしょうか。近代文明を走り続けた日本は一段落したのではない

かという認識です。無理に強引に達成した今の近代文明に新たに向きあわなければならなくなりました。これからも生き延びる私達のために今何をすればいいのかを問い直さなければなりません。少なくとも、私達生命体には「都市自然」と「コミュニティの確保」は必要な要素でありましょう。過去の60年、100年の生活スタイルを問い直し、次に進む事を考え直さなければなりません。1000年、2000年の歴史から私達日本の本質を学び取り、先人が生き延びてきたように、私達も生き延びるための知恵を出す時がきたのです。

## 7. おわりに

今回の論文は昨年11月19日に日本都市計画学会の60周年記念パネルディスカッションの「都市計画」の志向する未来、「都市計画学」の拓く道一に応募した論文のその後の各論と致します。いつの時代も迷った時は過去から学ぶ事の事例として「京都の町家再生研究活動」をとりあげました。永い過去から現代にまで生き続ける京都市内は今、近代文明との向き合いこととも苦しんでいます。何百年と継承している都市生活が正に替わろうとする局面に出会っています。もっともっと長い時間をかけて進化する必要がありますが、社会性・経済性の側面がボディブローの如く市民性を直撃しています。今、私達は日本のアイデンティティを問いつづけ子供達の将来を守る術を、知恵を、つけなければならぬ、と焦るこの頃です。

「長い歴史を生きぬいてきた京都町家に、町家群に、町家のコミュニティに、学ぶべき答えを・現代の私達に生き延びる術を教授願いたい」

## 文献

- 1): 「京都の住職一体型の住居形式」京都市の定義：「1950年以前に伝統的木造軸組構法で建てられた木造家屋」
- 2): 朝日新聞 2011年1月8日「人類学者エマニュエル・トッド」日本社会を超個人主義的とみるのはおかしい。まだ個人と共同体の密接な関係が残っているでしょう。けれど日本にもほかの国と同様に不平等などグローバル化の影響は見られます。超個人主義を生み出したのは米国で、英仏も同じ方向に向かった。日本は外から来た思想に苦しんでいるのです
- 3): 都市住宅 1972年10月「上田 篤」  
現在日本の自治会はどこにでもあるとあってよい。1956年に全国の町内、部落を対象に、自治省が調べた調査によると、町内会またはその代わるものが全然ないケースは、6大都市で4.2%、全国で2.4%にすぎなかった。(表1) 現在の町内会は、戦時中の戦争協力姿勢を問われて、戦後政令により一たん解散されたものが、1952年10月、同政令の失効ともなって復活したものであるが、その時の町内会の復活設立動機を東京都目黒区内を例にとってみると、親睦・相互扶助のため30%、防犯・防火協会よりの発展26.1%、治安維持・保険衛生のための21.4%、となっている。(表2)

表1 町内会・部落会の概要

	全国 %	6大都市 %	中小都市 %	郡部 %
イ) 町内(部落)会という名称で、旧来の町内(部落)会の機能を果たしているもの	35.8	31.0	36.6	36.8
ロ) 親睦会・自治会など名称は別だが、旧来の町内(部落)会と同じ機能を果たしていると考えられるもの	35.3	39.5	39.5	29.7
ハ) 名称が特にないが、地域的な自治組織ないしは制度をもつ区域	19.5	7.0	16.3	27.5
ニ) 防犯協会、衛生組合等特殊の目的のための地域団体で、町内(部落)会の機能を兼ねていると考えられるもの	4.9	18.3	2.9	1.6
ホ) 地域団体はあるが、性格不明のもの	2.1	—	2.3	2.8
ヘ) 町内(部落)会、その代わるものがない区	2.4	4.2	2.3	1.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0

自治庁「町内会・部落会についての調査」1956年による

表2 目黒区町内会設立動機

動機	親睦相互援助のため	町内治安維持及び保健衛生のため(衛生維持のため)	官公庁との連絡強調のため	防犯防火協会より発展したもの	各種団体mの統合	募金の円滑をはかるため	災害発生を契機として	旧町会の復活	その他
目黒区	% 30.9	21.4	9.5	26.1	7.1	2.5	0	2.5	0

4):京町家通信 VOL・1 1995年2月11日「堀江悟郎」  
 町家とはなにか、これは平等と連帯と繁栄をめざした市民性の産物であって、封建的制約の下で時代と地域に見事に適応した商業社会の具体例として貴重なものであった。しかし今は自由競争の世の中となり、価値観は文化より経済が優先し市民から平等と連帯が失われて、他人を押しつけることと個人権利の拡張とがこれに取って替わった。  
 つまりかつて町家を成立させた市民性は消滅して古くも新しくも町家というものの本質はなくなってしまうのである。